

修士論文（要旨）

2015年1月

題目

— 楽器のアピール性と性格特性の関係性 —

指導 山口 創 准教授

心理学研究科

健康心理学専攻

213J4052

小島壽子

Master's Thesis (Abstract)

January 2015

The Relationship between Attraction to Musical Instruments and Individual Personality

Toshiko Kojima

213J4052

Master's Program in Health psychology

Graduate School of Psychology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

1、序章 はじめに	1
第1章 人類にとって楽器とは	2
1.1 音楽と楽器	2
1.2 楽器の分類と種類	3
第2章 性格特性と好み	4
2.1 性格とは	4
2.2 好みとは	5
第3章 研究1「楽器アピール性と性格特性の関係性」に関する調査研究	6
3.1 目的	6
3.2 方法	6
3.2.1 対象者	6
3.2.2 調査内容	6
3.2.3 実験の手続き	7
3.2.4 倫理的配慮	7
3.3 結果	7
3.3.1 楽器選択における回答結果	7
3.3.2 解析結果	9
3.4 考察	15
3.4.1 楽器志向調査について	15
3.4.2 楽器別性格特性について	16
3.4.3 本研究と Big Five 5つの次元と間人度について	16
3.4.4 結論	17
3.4.5 研究1の問題点と今後の展望	19
第4章 研究2「楽器を使用したグループワーク研究」	20
4.1 目的	20
4.2 方法	21
4.2.1 対象者	21
4.2.2 実験内容	22
4.2.3 実験の手続き	23
4.2.4 倫理的配慮	24
4.3 結果	24
4.3.1 分析対象者について	24
4.3.2 TDMS-ST 2次元気尺度の結果	24
4.3.3 POMS簡易版の結果	25
4.3.4 唾液アミラーゼ検査の結果	25
4.4 考察	28
4.4.1 TDMS-ST 2次元気尺度およびPOMS簡易版について	28
4.4.2 唾液アミラーゼモニター検査について	29
4.4.3 研究2の問題点と今後の展望	30
4.5 総合考察	30
引用・参考文献	
資料	

はじめに

音楽療法における能動的楽器活動において、人の性格により好ましいと思う楽器が異なっている様子が観察されることから、研究1では、楽器のアピール性と性格特性の関係性について検証し、研究2では楽器に触れる体験であるグループドラミングを実施し、気分や活動性の変化が起こるかについて検証した。

研究1「楽器のアピール性と性格特性の関係性」に関する調査研究

対象者

私立大学の学生、約400名に実施した。

目的

人の性格特性により好ましいと思う楽器が異なるのか、楽器のもつ潜在的な能力(アピール性)を検証することを目的とした。

方法

良く知られている楽器である、弦楽器、管楽器、鍵盤楽器、打楽器、小物楽器の一覧表の中から、楽器の外観や印象、演奏形態、音のイメージから、好ましく手にとってみたい楽器を一つ選択してもらうために「楽器志向調査」のアンケートを作成し調査を実施した。設問内容としては、好ましく手にとってみたい楽器を選択、その楽器を選んだ理由、楽器経験、性別、年齢について回答を求めた。また、対象者の性格特性を調査するために「Big Five 尺度(60項目)」、他者や社会生活に関する意見や態度について調査するために、「間人度尺度(21項目)」を使用し、選択楽器との関係性を検証した。

結果と考察

有効回答者は、男性23名、女性77名、合計100人、平均年齢は20.47歳(±4.73)であった。弦楽器を選択した者は43名、管楽器は24名、鍵盤楽器は20名、打楽器は13名であった。楽器選択において5名以上が選択した楽器別(ギター、ハープ、バイオリン、サクソ、フルート、ピアノ、アコーディオン、和太鼓、ドラムセット)に、回答者の属性による要因の相違に関して、属性が2水準の要因に関して対応のないt検定、3水準以上の要因に関しては一元配置の分散分析を行った。男女間での検定の結果に有意差があったのは、バイオリンを選択した者の外向性($t=1.71, p<.05$)、ハープを選択した者の情緒不安定性($t=3.22, p<.05$)、和太鼓を選択した者の開放性($t=4.24, p<.05$)であった。Big Five5因子尺度の楽器別一元配置分散分析の多重比較では、どの項目に関して有意差はなかったが、Big Five5因子尺度および間人度尺度のバランスに個々の性格特性がみられた。選択した理由としては“音が好き”と回答した者が最も多く全体の81%、次いで“演奏姿勢がいい”41%であった。“形や素材”と回答した者は全体の19%であり、聴覚的な好みの要因が有意であった。演奏姿勢の違いにより音の刺激や身体への感覚は異なり、そのことが楽器のアピール性と関係していることや、自分自身を環境と行動を適合させるために必要な特性に魅かれる、つまり『エコロジカル・マインド』生態学的な知性と関係していると考えられた。

研究2「楽器を使用したグループワーク」に関する研究

対象者

研究2では学生を対象とし、グループドラミング参加の同意を得られた健常者18名(男性5名、女性13名)に対し実験を行った。1回のみの実施者8名(男性1名、女性7名)、2回の実施者2名(男性1名、女性1名)、3回継続して実施した者は8名(男性3名、女性5名)であった。

目的

研究1では楽器のアピール性と性格特性の関係性について調査による検証を行ったが、第2研究では性格特性までの変化は期待できないとしても、実際の楽器に触れるグループドラミング活動によって、非言語的な人間の表現要素に働きかけ気分や活動性の変化が起こるのかについて検証した。

方法

実験参加者に対し、1回～3回/7日間に約60分程度の音楽グループワークを実施し、唾液アミラーゼモニター検査(3回実施群のみ)、POMS簡易版、TDMS-ST二次元気分尺度を、毎回実施前後に気分の変化を調査した。使用楽器はジャンベ、トゥバーノなどの太鼓や小物打楽器。セッションプログラムの流れとしては、音楽療法士である筆者のファシリテートによる①打楽器による即興演奏、②マレットを使用した創作リズム演奏、③カリンバ、ハピ・ドラム・レインスティックなどを使用したクールダウンといった流れで、約60分間のプログラムを実施した。

結果と考察

実験対象者は18名であったが、未回答であったもの、および回答に不備があったものを除き、15名の回答を最終的な分析対象とした。平均年齢は21.4歳(±1.73)であった。1回のみの実施者6名(男性1名、女性5名)、2回の実施者2名(男性1名、女性1名)、3回継続して実施した者は7名(男性3名、女性4名)であった。唾液アミラーゼ検査の実施においては、測定不能や数値が安定して測定できなかつた者を結果から除いた。安定して測定できた7名の介入前後の唾液アミラーゼの変化量を対応のあるt検定で検証した。TDMS-ST二次元気分尺度全体の比較では、安定度(S)が、($t=4.40, p<.001$)、快適度(P)が、($t=3.61, p<.001$)で有意差があった。POMS簡易版、有意差があったのは、全体の比較では、緊張-不安($t=2.83, p<.01$)、抑うつ-落ち込み($t=3.52, p<.001$)、怒り-敵意($t=2.45, p<.05$)、疲労($t=2.75, p<.01$)、混乱($t=2.6, p<.05$)であった。唾液アミラーゼの変化量は、介入前後では、($t=2.46, p<.05$)と有意な差があった。

本研究の問題点と今後の展望

研究1では、調査対象者が100名であり、男性の回答者が少なかったことから楽器別の性格特性と判断するには疑問が残っている。研究2のグループドラミングにおいては、対象者15名に気分の変化が見られた。近年の研究から、気分は学力や仕事のモチベーション、性格特性にも関係しているとの報告があり、現代人にとって日々生じる不快な状況からくる気分や感情ストレスを、いかに心地よい状態、快適な状態に改善させていくかが重要といえる。グループドラミングは有用な手法になりうることが示唆された。

主要参考文献

〔邦文〕

- 浅野雅子、古根川円、中島祥好:「音楽心理学の動向についてー音楽知覚、音楽と感情、音楽療法を中心にー」、芸術工学研究、12, 83-95, 2010
- 大杉鉦徳、田中芳幸、他:「気分・感情評価としての Visual Analogue Scale の応用、Jaoanese Journal of Health promotion and physical Therapy」、Vol. 4, No. 3: 137-141, 2014
- 笠井史人、小島寿子:『基礎から学ぶリハビリテーションと音楽療法-チーム医療に必要な知識と音楽アプローチ』音楽之友社、2013
- 工藤千枝、石出和也:「材質の違いに着目させる音楽学習」、弘前大学教育学部研究紀要クロスロード、第15号(2011年3月):19-26
- 小島寿子、佐藤隼、市川勝:「脳卒中片麻痺患者の麻痺側上肢に対する楽器演奏を用いた機能訓練の試みー多職種との連携を通してADLの向上を図るー」、日本音楽療法学会誌、Vol.9, 59-68, 2009
- 佐伯胖、佐々木正人編:「アクティブ・マインドー人間は動きの中で考えるー」、東京大学出版社、1990
- 齊藤崇子、中村知靖、遠藤利彦他:「性格特性用語を用いた Big Five 尺度の標準化」、九州大学心理学研究、Vol.2, 135-144, 2001
- 丹野義彦:『性格の心理-ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティー』、サイエンス社、2003
- 長野祐一郎:「スピーチ課題が唾液アミラーゼ活性に与える効果」、文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.10, No 1, pp.221~228, 2008.12
- 堀本ゆかり、丸山仁司、他:「認知領域に影響を与える性格特性分析」理学療法科学 26 (4): 525-530, 2011
- 三嶋博之:『エコロジカル・マインドー姿勢と環境をつなぐ心理学』、日本放送出版協会、2000
- 茂木大輔:『オーケストラ楽器別人間学』、新潮文庫、1996
- 八木ありさ:「ダンス・セラピーにおける共感についてー即興的身体表現による参加者主導型セッションの試みー」、日本体育学会大会号(42A),235, 1991-09-10
- 山崎晃男:「音楽と感情についての心理学的研究」、大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要、No.8, 221-232, 2009-01-31、731-736、2008
- Robert Lawrence Friedman: the Healing power Of the Drum, 2000. (佐々木薫訳:『ドラミング リズムで癒す心とからだ』、音楽之友社、東京、60-63, 2003
- 渡邊芳之、佐藤達哉:『性格は変わる、変えられるー多面性格と人格変容の心理学』、自由国民社、1996

〔欧文〕

- Bittman, BB., Berk, LS, Felten, DL, et.al.: Composite effects of group drumming music therapy on modulation of neuroendocrine-immune parameters in normalsubjects. Alternative therapies 7, 38-47, 2001